

第6回

旧・千葉医科大学附属医院
(現・千葉大学医学部本館)

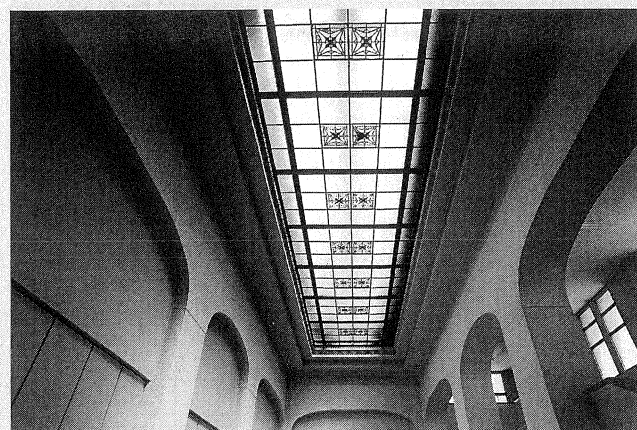
千葉大学医学部135周年記念事業会

高野晴美



(写真1) 旧・千葉医科大学附属医院

千葉大学の亥鼻キャンパスには医学部、附属病院、薬学部、看護学部等があり、健康生命科学の拠点となっています。このキャンパスにある、1936年(昭和11年)に竣工した旧・千葉医科大学附属医院(現・千葉大学医学部本館)をご紹介します(写真1)。



(写真2) エントランスホールの吹き抜け

医学部の歴史は1874年(明治7年)千葉町近隣の有志による共立病院の創設に遡ります。1890年(明治23年)当時の医学部が千葉町中心街から現在の亥鼻地区に移転し、1923年(大正12年)には千葉医科大学となりました。この年に関東大震災があったこともあ

り、新しく建てる附属病院には頑丈な構造が求められ、1931年(昭和6年)の着工から完成までに6年の歳月が費やされました。

設計は文部大臣官房建築課(担当課長柴垣鼎太郎)、施工は大林組、総工費は500万円でした。鉄筋コンクリート5階建て、延面積3万1283㎡、間口102m、奥行きは109mのほぼ正方形で、田の字の形をしています。外壁はクリーム色化粧煉瓦で、温かな感じでありながら堂々とした建築です。設備には、往時のドイツ医学の粋を集め、東洋一の病院と称せられました。千葉市は戦争時に七夕空襲などで多くの建物が消失しましたが、この建物は被害を受けずに、被災者救護にあたることができました。その後、新病院の竣工により、内部改修を経て1980年(昭和55年)以降、医学部の教育研究のための本館となり、いまでも愛着をもって使われ続けています。

正面玄関を入った荘厳なムードのエントランスホールは、建設当時の装飾がそのまま生かされています(写真2)。吹き抜け部の床は、赤、黄、青等の色タイルのモザイクが美しく、天井のステンドグラスからは色鮮やかな光が降り注ぎます。階段などの壁面を飾る大理石様の石には、古代三紀の示準化石である貨幣石を含む希少な石がイタリアから輸入され、ふんだんに用いられています。これほど多量の貨幣石を見ることができるのは、日本ではここだけかも知れません。